無縁社会 ―人とのつながりを再考する―

おやさと研究所助教
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

「無縁社会」という見方

日本社会における人間関係の希薄化をイメージして、「無縁社会」という言葉が用いられるが、それは 2010 年 1 月の「NHK スペシャル・無縁社会― 〝無縁死〟三万二千人の衝撃」における造語であり、それに続く NHK による一連の「キャンペーン報道」などを通して広く知られるようになった。

発端となったこの番組が描き出したものは、現代の日本社会には「無縁死」すなわち「ひとり孤独に亡くなり引き取り手もない死」(これも同番組による造語) が多発していることである。そして、その背景として、親子、兄弟姉妹などの血のつながっている関係、また、それにもとづく家族や親族という血縁関係の弱体化、さらには、同じ地域に住むことによってできた縁故関係のある地縁社会の弱体化によって、血縁、地縁の“しがらみ”から解放される一方、その人間関係が希薄化して、孤立傾向にある人が多くなり、そうした人々の中には、かつて持っていた家族・家庭を思う寂しさと、それにもかかわらず「人に迷惑をかけたくない」という意識が根強くあるという、現代社会の暗い一面をクローズアップしたのであった。

天理教の視点から

人と人とのつながりについて、一般に「袖振り合うも多生の縁」などと「縁」という言葉が使われるが、ここでは、人とのつながりの中に生きるということについて、天理教の視点から考えてみたい。

「おさしづ」には、次のような言葉がある。

> 皆中の中治まり、中々めん〳〵遠慮してはならん。人を以て遠慮してはならん。互い辞宜合いはそら無けにゃならん。道を始めた理に、人の遠慮気兼、人を恐れて居ては、尽して居る運んで居る理に添わん。(明治 32 年 12 月 14 日)

これはお道に引き寄せられた者同士の諭し合い、いわば「たすけあい」に関するさしづである。そこで、「互い辞宜合いはそら無けにゃならん」と諭される。「辞宜合い（じぎあい）」というのは見慣れない言葉であるが、互いに会釈すること、挨拶しあうこと、と『日本国語大辞典』（小学館）では説明され、「相嫁同士（あいよめどし）が門での辞宜合」（浄瑠璃・菅原伝授手習鑑）という用例が挙げられている。最初から人に迷惑と思われることを恐れて、声をかけること、人をたすけることを遠慮気兼していては「世界一れつをたすけるために天降つた」という「道を始めた理」にそわない、と諭されている。気づいたところで、会釈しあい、挨拶をしあう、そして手助けを申し出るような態度が、「たすけあい」にむけての第一歩になるというのである。

親神の守護による「縁」

血縁、地縁がゆらいでいるとは言われるが、家族の絆が大事だと考える人はむしろ増加傾向にあることは、東日本大震災以後しばしば指摘されている。しかし、もしそれが家族の内と外を隔てる態度に転じるとすれば、それはたすけあいとは逆の方向に向かう。「おさしづ」では、親族に関連して次のように諭される。

> 世上には皆親子兄弟と言うて、親族と言うても、兄弟何にも隔てる理は無い。(明治 24 年 1 月 27 日)
>
> さあ〳〵人間というは神の子供という。親子兄弟同んなじ中といえども、皆一名一人の心の理を以て生れて居る。(明治 23 年 8 月 9 日)

人間は一名一人が心の理に応じて、親神から「かりもの」の身体をお借りして生きている。そのことを、「人間というは神の子供」であり、人間同士お互いは「きょうだい」であると教えられる。これは「夫婦・親子・兄弟の間柄という、きわめて近縁の間柄と思われる事柄以上に、きわめて基本的な事柄」（深谷忠政編『教理研究事情さとし』459 頁）であるとされる。

そして、一般に「家族」と呼ぶ間柄は、各自の心の理に応じ、親神によって、特に近くに寄せられた間柄である。したがって、親神によって結ばれた「縁」あるお互いが感謝し合って生きることが大事である。しかし、それは血縁で結ばれた「家族」に限定されるものではない。「兄弟の中の兄弟」(『逸話篇』163 話) にあるように、親神によって引き寄せられた「縁」ある者同士が「きょうだい」としての自覚を持ち、親なる神の守護に感謝し、それに応える親孝行が求められるであろう。

その親孝行の仕方は、次の「おふでさき」（三号 28 － 41）に端的に記されている。

> 人のものかりたるならばりかいるで
> はやくへんさいれゑをゆうなり（三号 28）
> しんぢつに人をたすける心なら
> 神のくときハなにもないぞや（三号 32）
> しんぢつにたすけ一ぢよの心なら
> なにゆハいでもしかとうけとる（三号 38）
> たん〳〵となに事にてもこのよふわ
> 神のからだやしやんしてみよ（三号 40）
> にんけんハみな〳〵神のかしものや
> なんとをもふてつこているやら（三号 41）

この一連の「おふでさき」は、子が泣くでない神の口説きや、と子の夜泣きを糸口として、その両親（夫婦）の心得違いのないように、はやく思案をしてもらいたい、と諭されている。人にちょっとしたものをお借りしても、はやく返済してお礼を言う。人間というものは、親神の懐の中で住まいさせていただいて、この「かりもの」の身体をお借りし、さまざまな人やものとの「縁」を与えられて生きている。それに対するお礼はどうするのか。それは、真実に人をたすける心、真実にたすけ一条の心なら、親神はしかと受けとる、と言われる。

別席の誓いの言葉の末尾に、「親神様に御満足して頂き、ひと様に喜んで貰うようつとめさせて頂き度う御座います」とある。「縁」をいただく夫婦・親子・兄弟など身近な間柄から、にちにち、親神へのお礼と人に喜んでもらうようつとめる、この二つが一つとなる生き方を求められているのではないだろうか。